IS　≪１人の双銃使い≫

月光姫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＩＳ　≪１人の双銃使い≫

【Ｎコード】
Ｎ０４４７Ｚ

【作者名】
月光姫

【あらすじ】
世界で、２人目の男の操縦者が決まった。名前は、小鳥遊悠樹。しかし、誰にも言えない秘密がある。それは、セシリアも覚えていないが、セシリアと幼馴染だったことだった。そんな中物語は時間を進める。

この、作品が批判されそうなきはしますがそれでも良いと言う方は生暖かい目で見守って下さい。
よく、中の人ネタを使うのでご了承下さい。

1話（前書き）

感想に、止めろなどの言葉を贈らないで下さい。お願いします。

1話

俺は、今とても緊張している。理由は、世界で2人目にＩＳが使える男に選ばれてしまったんだが転入扱いだと言うことで目の前が９９％女子だからだ１％は男だが、今日から２％が男になる。でも、入学式の日に転入はおかしいよな？

「えーと、今日から転入してきた小鳥遊悠樹君です。自己紹介をお願いします」

この人は、山田真耶先生。ほぼ、中学生と言って間違えられないと思う。

「何か、馬鹿にされた気がするんですが気のせいでしょうか？」

読心術でも使えるのだろうか？っと、自己紹介をしないとな……

「えーと、紹介のあった通り小鳥遊悠樹です。趣味は、読書と音楽を聴く事です。これから、よろしくお願いします」

『……』
え？無言は無いよね？泣きそうなんですけど、泣いて良いですか？
『キャァァァァァァァ！！』
「2人目の男の子！」
「でも、何で入学式の当日に転入扱いなんだろう？」
「織斑君とは、違う良さがあるよ！！」
「静かにせんか！」
『……』
なんという統率力だ。軍隊か此処は！？
バシンッ！！
「馬鹿にされた気がしてな」
此処の人達は人外です。読心術が使えるなんて、悔しいです。
「これで、HRを終わる。起立！礼！！」

～休み時間～

「よう」
確か、こいつが世界で最初にＩＳを動かしたんだよな。
「どうも」
「俺は、織斑一夏。よろしくな。一夏って呼んでくれ」
「おう。俺は、さっきも自己紹介をしたが小鳥遊悠樹。悠樹って呼んでくれ親しい奴は、皆呼んでるから」
「わかった。よろしくな、悠樹」
「おう、よろしく。一夏」
ＩＳ学園で、初めての友達ができました。やったね！
「ちょっと、よろしくて」

「おう」

「はじめまして」

「まぁ！？なんですの！その返事は！そちらの転入生は礼儀を知っているようですが」

「だって。イギリス代表候補生のティア・グランツでしょ？」

「違いますわ！！それは、中の人が同じなだけでしょう！？」

「メタ発言は、自重しないとダメだよ？風花さん」

「その人でもありませんわ！！」

※ティア・グランツはテイルズオブジアビスで風花はセキレイです。知っている人が多いと思いますが、念のため知らない人もいると思うので書いておきます。

「いや、冗談だからね。セシリア・オルコットさん」

「なんですの。知っていましたか」

「なぁ。悠樹」

「ん？」

「代表候補生ってなんだ？」

「ヱ？」

なんですと？知らないの！？

「国の代表の一歩手前のエリート的な感じの人たちだよ」
そう言った瞬間、セシリアの目が光り
「そう。エリートなのですわ！！」
偉そうにされても、困ります。
「そうか。それは、ラッキーだ」
「馬鹿にしてますの？」
「だって。お前がそう言え的な雰囲気を出してるから」
キーンコーンカーンコーン
「後で、また来ますわ」
「また、からかってあげてしんぜよう」
「嫌です！！」
「冗談だから」

〜二時限目〜

「これから、授業を始める。っとその前にクラス代表を決める」

忘れてたのかな？織斑先生。って一夏と姉弟なのかな？まぁ、いいや。

「自選他薦は問わない。誰か、やりたい奴はいるか？」

「はい。織斑くんを推薦します」

「わたしも、織斑くんを推薦します」

「先生」

「どうした？小鳥遊」

「俺、クラス代表をやります」

「自選か……何故だ？」

「こういうのは、自分から進んでやらないと意味が無いと思ったからです」

「なるほど、一理あるな。他に、誰かいないのか？」

バシンッ！！

「待って下さい。男がクラス代表なんて良い恥さらしですわ！！なるんだったらこのセシリア・オルコットがクラス代表になります！！」

威勢が良いね。でも、足りないなぁそれだけでは。

「だいたい、極東に来るだけでも。屈辱なんですのに」

「おいおい。イギリスだって対したお国自慢無いだろ。世界一まずい料理で何年覇者だよ」

「あ、あなたねぇ！？私の国を侮辱しますの！！」

「先に、侮辱したのはお前だろ」

「……決闘ですわ！！」

「お前らなぁ。俺のことを忘れてないか？」

「ごめん。忘れてた」

「そうか、そうか。じゃあ俺も、混ぜてくれよ」

「やめんか。馬鹿者ども。では、話がまとまったので来週の月曜日に第３アリーナでクラス代表選を行う。異論は無いな？」

『はい』

こうして、クラス代表決定戦が決まった。

1話（後書き）

この作品は、地の文が他の作品より少ないと思いますが増やそうと努力しているのでご了承下さい。感想まってます。こう言う話をやって欲しいなどのリクエストが有りましたら、感想に書いて送って下さい。

2話

早かったな。1週間が、

「所で、何で遅いんだ？一夏のＩＳは」

「なぁ箒、気のせいだよな？」

「気のせいだろう」

「何で、剣道しかやってないんだよ！」

「一夏、うるさい」

「あぁ、悪い」

「箒にも、考えがあるんだよ」

何故、箒と言っているかというと剣道で1本とったからだ。

「織斑くん！織斑くん！織斑くん！！」

「はい！先生どうしました？」

「来ましたよ！織斑くんの専用機が！！」

「本当ですか！？」

「早く、行くぞ！一夏！！」

「おう！！」

「こ、これは」
そこには、白があった。何も遮ることができない白が……
「これが、織斑くんの専用機。白式です！」
「白式。これが、俺の専用機……」
「フォーマットとフィッティングは実戦でやれ。さもなくば、負けるだけだ」
「おう。あっと、箒」
「なんだ？」
「行ってくる」
「あぁ。勝ってこい！」

「よくもまぁ。あそこまで、持ち上げたものだ。それで、あれか大馬鹿者」

「うっ」

「まぁ。次は、小鳥遊だ。行けるな」

「はい。いつでも」

「では、行ってこい」

「はい！」

～アリーナ上空～

「逃げずにきましたのね」

「あぁ。出なきゃ、クラス代表ができないのでな」

「そうですか。でわ、散りなさい！！」

「危な！」

いきなりは、無いだろ。

「じゃあ。、行くぜ。ドリッドトリガー！」

「なっ！？あなたも、銃を使いますの？」

「あぁ。でも俺は――――――――

――――――――――――――双銃だ」

「なっ！？」

「行くぜ！スカーレット！」

「は、早い。しかし、ブルーティアーズ！！」

２機のＢＴが俺をめがけてレーザーを出してくる。しかし、俺には効かない！

「待ってました！ツインバレット！チャージバレット！アクアバレット！！」

俺は、ＢＴ２機に向けてまず連射を放った後にための一撃を放ち最後に水に囲まれた連射を放つ。

「きゃあぁぁぁぁぁ！！」

ビィィィィィ！！勝者、小鳥遊悠樹。

「危ない！！」

ふう、間一髪だったな。あと少しで落ちるところだったぞ。

そういえば、俺って今日から寮で生活なんだよな。

「小鳥遊、ビットに戻って来い」

「はい。その前に、セシリアを保健室に連れて行きます」

「分かった」

～回想～

なんですの？これは、夢？

「何で、お母様とお父様が……何で！！」

この時は、確か列車の事故で2人とも死んでしまった時ですわね。

「大丈夫か？セシリア？」

え？何で、小鳥遊さんが居るんですの！？

「私に話しかけないで！あなたの事も信用できなくなって来ているのですから」

「別の良いよ。俺が、好きでいるだけだから。泣きたいんなら泣けば良いじゃん。何で1人で溜め込むの？別に、泣くことは恥ずかしくないよ。恥ずかしいのは、自分1人で隠す事だよ」

「え？」

「俺は、気にしないからさ。今だけでも泣いておいた方が後で楽になるよ」

「うん」

思い出しました。小鳥遊さん……悠樹が此処にいた理由を。

～保健室～

「う、ん」

「おっ。起きたかセシリア」

「はい、悠樹が運んでくれたんですの？」

「思い出したのか？」

「えぇ。懐かしい思い出ですもの」

「そうか。じゃあ、俺は先生に呼ばれているから」

「はい。また、後で」

ん？後で？まぁ良いか。

～職員室～

「失礼します。織斑先生」

「あぁ。来たか、今日から寮で生活することなんだが」

「はい」

「これを。渡しておく」

「部屋の鍵ですか？」

「あぁ。お前は、１０３８号だからな」

「わかりました」

～１０３７号室前～

「さてと。って、この部屋ってセシリアふぁ居るんじゃないだろうな」

「ご明答ですわ。悠樹」

「お前な、さっき分かっていたからあぁ言ったのか？」

「えぇ。当たり前です」

「さてと、俺は寝るぞ」

「はい。おやすみなさい」

「おう。おやすみ」

こうして、長い1日が終わった。

2話（後書き）

どうでしたか？地の文が少ないですハイ。これからも、頑張るので応援よろしくお願いします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0447z/

IS　≪１人の双銃使い≫

2011年12月1日21時00分発行